

The Economics of Audit Culture

玉岡 雅之

報告要旨

「一つの妖怪が世界中に現れている、監査文化という妖怪が。」

1980年代以降、行政の分野を皮切りに高等教育の世界にこれまでとは異なった物差しが用いられるようになった。行政や教育のパフォーマンスを数値化し、市場原理を行政・教育の場で働かせようとする「監査文化」という物差しである。

監査文化は「定量的な目標設定とその達成を押し付ける文化」と定義することができる。本報告では監査文化の由来を説き起こし、行政や教育の分野でどのようにしてその文化が浸透していったか、そしてその結果行政や教育のパフォーマンスは予期されるように向上したかどうかを検証する。

監査文化を経済学的に検討した研究はなく、経済学の物差しである効率性、公平性といった尺度で監査文化のもたらした影響を測ると、効率性の面では一時的にパフォーマンスの改善をもたらすものの永続的ではなく、21世紀に入ってから社会現象ともなっている格差が行政・教育の分野でも広がっていることが明らかである。

このような広範な影響を **Le Grand** モデルを用いても分析し、「良い評価」と「悪い評価」があることを明らかにする。「評価のための評価」というグッドハートの法則に陥らないようにするために、目的設定とそれを達成するための手段の峻別を行い、目的設定の重要性を明らかにし、「良い評価」を行政・教育のパフォーマンスの改善につなげるような方法を考察する。